



# Sun Fire™ X4250 サーバー ご使用にあたって

---

Sun Microsystems, Inc.  
www.sun.com

部品番号 820-5733-10  
2008 年 7 月、改訂 A

本書についてのご意見・ご感想は、<http://www.sun.com/hwdocs/feedback> のフォームを使って弊社までお送りください。

Copyright © 2008 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

本製品には Sun Microsystems, Inc. の機密情報および企業秘密が含まれています。Sun Microsystems, Inc. の書面による事前の許可なく使用、公開、または複製することを禁じます。

本製品にはサードパーティーによって開発された素材が含まれている可能性があります。Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴ、Java、Solaris、StarOffice、Sun Ray、Galaxy Sun Fire X、および SunSpectrum Pac は、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Intel は Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Intel Inside は Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

本製品は、米国輸出管理法の対象であり、これらの法律により管理されます。また、その他の国の輸出または輸入に関する法律の対象となる可能性があります。原子力、ミサイル、生物化学兵器、または海洋核戦力の最終用途での本製品の使用、またはそれらに携わるエンドユーザーによる本製品の使用は、直接あるいは間接を問わず、固く禁じられています。米国の通商禁止国または輸出禁止リストに掲載されている団体、禁止対象の個人や特別に指定された国の国民などに対する輸出または再輸出は固く禁じられています。

CPU の予備品または交換品の使用は、米国の輸出法に準拠して輸出された製品の CPU の修理または 1 対 1 での交換に限り許可されています。米国政府の許可を得ることなく、製品のアップグレード目的で CPU を使用することは、固く禁じられています。



リサイクル  
してください



Adobe PostScript

# Sun Fire X4250 サーバ ご使用にあたって

---

本書では、Sun Fire™ X4250 サーバに関する最新情報と注意事項を説明します。

本書で説明する注意事項は次のとおりです。

- 「サポートされているオペレーティングシステム」 (2 ページ)
- 「Tools and Drivers CD 1.0a」 (2 ページ)
- 「ハードウェアと BIOS」 (3 ページ)
- 「システム管理の仮想デバイスに関する注意事項」 (5 ページ)
- 「システム管理のブラウザに関する注意事項」 (10 ページ)
- 「診断に関する注意事項」 (11 ページ)
- 「Sun Installation Assistant の注意事項」 (13 ページ)
- 「Solaris に関する注意事項」 (15 ページ)
- 「Linux に関する注意事項」 (16 ページ)
- 「Windows 2003 Server の注意事項」 (18 ページ)
- 「LSI 3081E ホストバスアダプタに関する注意事項」 (20 ページ)
- 「StorageTek SAS コントローラに関する注意事項」 (21 ページ)
- 「Sun 10G ネットワークアダプタの注意事項」 (22 ページ)
- 「ドキュメントの注意事項」 (23 ページ)

---

**注** – Sun 社は、本書で挙げているサードパーティーの Web サイトの利用について責任を負いません。また、当該サイトまたはリソースから入手可能なコンテンツや広告、製品またはその他の素材を推奨したり、責任あるいは法的義務を負うものではありません。さらに、他社の Web サイトやリソースに掲載されているコンテンツ、製品、サービスなどの使用や依存により生じた実際の、または疑わしい損害や損失についても責任を負いません。

---

---

# サポートされているオペレーティングシステム

Sun Fire X4250 サーバーでは、次のオペレーティングシステムがサポートされています。

- Solaris 10 8/07 および 5/08
- Red Hat Enterprise Linux 4 Update 5
- Red Hat Enterprise Linux 4 Update 6 64 ビット
- Red Hat Enterprise Linux 5 Update 1 64 ビット
- SLES 10 SP1 64 ビット
- VMWare ESX 3.5
- Windows 2003 Enterprise Server (32 ビットおよび 64 ビット)
- Windows 2003 Advanced Server (32 ビットおよび 64 ビット)
- Windows 2008 Enterprise Server (32 ビットおよび 64 ビット)

---

## Tools and Drivers CD 1.0a

Tools and Drivers CD 1.0a は、Sun Fire X4250 サーバー用の最初のソフトウェアアップデートです。最新バージョンの Tools and Drivers CD は、次のサイトからもダウンロードできます。

<http://www.sun.com/servers/x64/X4250/downloads.jsp>

Tools and Drivers CD 1.0a には、次のファームウェア、ツールおよびドライバが入っています。

- Pc-Check 診断バージョン 6.20
- BIOS バージョン 1ADQW051
- SP バージョン 2.0.2.6
- サポートされる Solaris、Linux および Windows オペレーティングシステム用のドライバとアプリケーション
- Windows ドライバのインストール用 AutoRun ユーティリティ
- X4250 用 SNMP MIB ファイル
- SP リカバリユーティリティ

---

# ハードウェアと BIOS

次の注意事項は、Sun Fire X4150 サーバーハードウェアまたは BIOS に適用されます。

- 「BIOS POST 中に BMC が応答しない」(3 ページ)
- 「DIMM 装着ルール」(3 ページ)
- 「SP/BIOS フラッシュプロセスのスク립ト」(4 ページ)
- 「ブートアップ中に USB フラッシュデバイスを有効にする」(4 ページ)
- 「前面 USB ポートのケーブルの制限」(4 ページ)
- 「ハードディスクドライブを挿入する際の重要な注意事項」(5 ページ)

## BIOS POST 中に BMC が応答しない

まれに、BIOS POST 中に BMC が応答しないというメッセージが表示されることがあります。BIOS が停止してこのメッセージが表示された場合は、次の手順に従います。

- **Ctrl+Alt+Delete** キーを押してサーバーをリポートします。  
この問題は今後のリリースで修正される予定です。詳細は、CR6714006 を参照してください。

## DIMM 装着ルール

- DIMM は同一のものをペアで装着します。
- DIMM は、A0/B0、C0/D0、A1/B1、C1/D1 の順に DIMM スロットに装着します。
- ペアにする DIMM は、サイズ、速度、製造元が同じものにします。
- 別の DIMM ペアでは、DIMM の容量は異なっていてもかまいません。  
たとえば、DIMM スロット A0/B0 に 1G バイトの DIMM、DIMM スロット C0/D0 に 2G バイトの DIMM、という組み合わせは有効です。
- DIMM はサイズの大きいペアから順に装着するようにしてください。  
たとえば、4G バイトの DIMM が 4 個、2G バイトの DIMM が 4 個ある場合は、A0/B0=4G バイト、C0/D0=4G バイト、A1/B1=2G バイト、C1/D1=2G バイトの順に装着します。

## SP/BIOS フラッシュプロセスのスク립ト

SP/BIOS フラッシュプロセスでは、サービスプロセッサ (SP) のフラッシュが完了すると「Update Successful (アップデート成功)」メッセージが表示されます。このメッセージは SP のフラッシュ動作のみが終了したことを意味します。処理のこの時点では、BIOS はフラッシュされていないため、プロセスを中断 (たとえば、手動でリポート) すると、BIOS が破損します。BIOS の破損を防ぐため、次のフラッシュ手順を確認してください。

1. SP のフラッシュプロセスが開始されます。
2. SP のフラッシュプロセスが完了します。
3. CLI が「Update Successful (アップデート成功)」メッセージを返します。
4. システムがリポートされ、BIOS のフラッシュプロセスが開始されます。
5. BIOS のフラッシュプロセスが完了します。

リモートで BIOS/SP をフラッシュするスク립トを作成する前に、リアルタイムでシーケンスをよく見てください。単独のシステムで、作成したスク립トをテストしてから、システム全体をアップデートしてください。

## ブートアップ中に USB フラッシュデバイスを有効にする

ブートアップ中に USB フラッシュデバイスを有効にするには、F2 キーを押して BIOS メニューに入り、「Boot (ブート)」->「Hard Disk Drives (ハードディスクドライブ)」を選択して、最初のドライブに USB フラッシュデバイスを選択します。

## 前面 USB ポートのケーブルの制限

前面パネルにある USB ポートでは、デバイスへの接続用ケーブルとして 3 メートルのケーブルしか対応していません。

## ハードディスクドライブを挿入する際の重要な注意事項

ハードディスクドライブを挿入する際は、レバーを 70 度以上開かないで下さい。挿入時にレバーを 70 度以上開くと、一番右のタブが壊れるおそれがあります。誤ってタブを壊しても、最終的な結果は純粹に外観だけの問題です。完全に挿入すれば、タブが壊れてもドライブは正しく動作します。

---

## システム管理の仮想デバイスに関する注意事項

次の注意事項は、Integrated Lights Out Manager (ILOM) のリモートコンソールシステムに接続されている仮想デバイスに関連しています。

- 「リモートの Sparc システムでサポートされる最低バージョン」(6 ページ)
- 「一部の仮想 USB フラッシュデバイスが Solaris にマウントされない」(6 ページ)
- 「Solaris リモートコンソールセッションで Java プラグインが要求される」(6 ページ)
- 「Web インターフェイスのタイムアウト時間を選択する」(7 ページ)
- 「ホスト OS に従ってマウスのモード設定を選択する」(7 ページ)
- 「ローカルマウスとホストマウスの間で操作を切り替える」(8 ページ)
- 「Firefox 上でリモートコンソールを実行するためにはポップアップの有効化が必要」(8 ページ)
- 「Solaris でのリモートコンソールと仮想デバイス」(8 ページ)
- 「Red Hat Enterprise Linux 5 で Java がサポートされていない」(8 ページ)
- 「仮想メディアが USB デバイスとみなされる」(8 ページ)
- 「ブートアップ中に仮想 CD-ROM を有効にする」(9 ページ)
- 「リモートコンソールを使用したリモート OS インストールでは仮想 CD-ROM のアンマウントと再マウントが必要」(9 ページ)
- 「CD-ROM の再マウント中に OS がインストールを停止する」(9 ページ)

ILOM については、オンラインの『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド』を参照してください。

## リモートの Sparc システムでサポートされる 最低バージョン

Sparc ベースのシステムから Web インターフェイスを実行する場合、Solaris 10 が、サポートされる最低のバージョンです。

## 一部の仮想 USB フラッシュデバイスが Solaris にマウントされない

一部の USB フラッシュデバイスでは、ILOM に仮想デバイスがマウントされたように見えても、実際はマウントされません。この問題は現在調査中です。

## Solaris リモートコンソールセッションで Java プラグインが要求される

Solaris システムでリモートコンソールセッションを起動すると、`javaRKVM.jnlp` ファイルに関する選択を求めるプロンプトが表示されます。次の 2 つのオプションがあります。

- root としてログインしている場合は、デフォルトのアプリケーションでファイルを開くオプションを選択します。
- root 以外のユーザーとしてログインしている場合は、次の手順に従います。

1. ファイルを保存するオプションを選択します。

`javaRKVM.jnlp` ファイルがダウンロードされます。このファイルを手動で実行します。ダウンロードマネージャーによってこのファイルの場所が表示されます。

2. `javaRKVM.jnlp` ファイルを `/tmp` ディレクトリに移動します。

```
% mv /location_of_javaRKVM.JNLP/javaRKVM.JNLP /tmp
```

ここで、`location_of_javaRKVM.JNLP` は `javaRKVM.JNLP` があるディレクトリです。

3. `javaws` アプリケーションのある場所を検索するには、端末ウィンドウで次のコマンドを入力します。

```
% which javaws
```



4. 端末ウィンドウで次のコマンドを実行します。

```
% /location_of_javaws/javaws /tmp/javaRKVM.JNLP
```

ここで、*location\_of\_javaws* は *javaws* があるディレクトリです。

例:

*javaws* アプリケーションが */usr/bin* ディレクトリから実行されている場合

```
% /usr/bin/javaws /tmp/javaRKVM.JNLP
```

このコマンドによって、リモートコンソールセッションが開きます。リモートコンソールウィンドウを閉じると、*/tmp/javaRKVM.jnlp* は削除されます。

## Web インターフェイスのタイムアウト時間を選択する

リモートインストールを実行する際は、Web インターフェイスのタイムアウト時間を選択することをお勧めします。Web インターフェイスのタイムアウト時間を選択するには、次の手順に従います。

1. ILOM Web インターフェイスにログインします。
2. 「System Information (システム情報)」タブ、「Session Time-Out (セッションタイムアウト)」タブの順にクリックします。
3. 15 分、30 分、1 時間、3 時間のいずれかにタイムアウトを設定します。
4. 「Apply (適用)」をクリックします。

## ホスト OS に従ってマウスのモード設定を選択する

ローカルマウスで ILOM Web インターフェイスを介してリモートでホストを操作するには、ホスト OS に合った正しいマウスのモードを選択する必要があります。

1. 次のうちから、適切なマウスのモードを選択します。
  - お使いのホストで Windows OS または Solaris が動作している場合は、「絶対」のマウスモードを選択します。
  - Linux OS の場合は「相対」のマウスモードを選択します。
2. この変更内容を適用するには、SP をリセットします。

## ローカルマウスとホストマウスの間で操作を切り替える

ローカルマウスとホストマウスの間で操作を切り替えるには、「Alt +M」キーを押します。

## Firefox 上でリモートコンソールを実行するためにはポップアップの有効化が必要

ILOM の Web インターフェイスでリモートコンソールを実行しているブラウザでポップアップブロックを有効にしていると、Firefox でリモートコンソールの起動がブロックされます。リモートコンソールが表示されない場合は、内蔵のポップアップブロックでブロックされているかどうかを確認してください。

## Solaris でのリモートコンソールと仮想デバイス

リモートコンソールシステム上で Solaris を実行している場合、仮想デバイスをマウントするためには root (スーパーユーザー) としてオペレーティングシステムにログインします。

## Red Hat Enterprise Linux 5 で Java がサポートされていない

Red Hat Enterprise Linux 5 では Java がサポートされていません。

## 仮想メディアが USB デバイスとみなされる

仮想メディアは USB デバイスとみなされるため、CD-ROM デバイスとして一覧表示されます。この設定は、現在 USB デバイスとして設定されているすべての CD-ROM に優先されます。

## ブートアップ中に仮想 CD-ROM を有効にする

ブートアップ中に仮想 CD-ROM を有効にするには、次の手順に従います。

1. F2 キーを押して BIOS メニューに入ります。
2. 「Boot (ブート)」 → 「CD/DVD Drives (CD/DVD ドライブ)」の順に選択します。
3. 最初のドライブに仮想 CD-ROM を選択します。

## リモートコンソールを使用したリモート OS インストールでは仮想 CD-ROM のアンマウン トと再マウントが必要

リモートコンソールセッションを使用してリモートでオペレーティングシステムをインストールする場合は、CD ごとに仮想 CD-ROM のアンマウントと再マウントが必要です。仮想 CD-ROM を取り出すと、OS によって USB デバイスが取り外されたとみなされるため、インストールを続行するには CD-ROM を再マウントする必要があります。

## CD-ROM の再マウント中に OS がインストールを 停止する

オペレーティングシステムのインストール中に CD-ROM を再マウントすると、エラーが発生し、OS が CD-ROM にアクセスできなくなります。この問題は今後のリリースで修正される予定です。

# システム管理のブラウザに関する 注意事項

この節では、次の注意事項について説明します。

- 「サポートされている最低限のブラウザ」(10 ページ)
- 「各ブラウザでの Java Runtime Environment の構成」(10 ページ)
- 「ビデオのストリーミングとリモートコンソール」(11 ページ)

## サポートされている最低限のブラウザ

次の表で、Solaris、Linux、および Windows オペレーティングシステムが稼働している Sun Fire X4250 サーバーで ILOM の Web インターフェイスを実行する場合にサポートされる最低バージョンを示します。

表 1 ブラウザのバージョン番号

	Solaris X86	RHEL 32-bit	RHEL 64-bit	SLES 32-bit	SLES 64-bit	Windows
Mozilla	1.7	1.7.12	1.7.13	1.7.8	1.7.13	N/A
Firefox	1.5.0.4	1.0.7	1.5.0.4	1.5.0.4	1.5.0.4	1.5.0.4
Internet Explorer	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	6

## 各ブラウザでの Java Runtime Environment の 構成

ILOM の Web インターフェイスを実行するブラウザでは、Java Runtime Environment (JRE) 5 Update 7 が、サポートされている最低のバージョンです。Mozilla および Firefox ブラウザ用の JRE 5 Update 7 をダウンロードするには、次の手順に従います。

1. 次の URL にアクセスします。

<http://www.java.sun.com/>

2. 「Get Java Software (Java ソフトウェアをダウンロード)」 ボタンをクリックします。

3. 新しく開いたウィンドウで「ダウンロード」をクリックします。  
Web サイトには使用しているオペレーティングシステムに対応するプラグインオプションが表示されます。
4. 「ダウンロードを開始」をクリックして、適切なプラグインをダウンロードします。  
このサイトでは、インストール方法の参照とプラグインの検証も可能です。

## ビデオのストリーミングとリモートコンソール

ILOM SP のリモートコンソール機能は、システムを管理するために作られたものです。大きなビデオ帯域幅を必要とするアプリケーション (ビデオを見るなど) は、リモートコンソールでは正常に動作しません。

---

## 診断に関する注意事項

次の注意事項は、Pc-Check 診断ソフトウェアのバージョン 6.05 に適用されます。

この節では、次の注意事項について説明します。

- 「Pc-Check が RAID デバイスを識別できない」 (11 ページ)
- 「キーボードの LED のテスト中に Pc-Check がハングする」 (12 ページ)
- 「シリアルポートのテストでエラーが発生する」 (12 ページ)
- 「APM メニューでスタンバイ電源を選択すると回復できない」 (12 ページ)
- 「USB コントローラのテストを実行した後キーボード入力できなくなる」 (12 ページ)
- 「割り込みコントローラのテストの後システムがハングする」 (12 ページ)
- 「毎回ライセンス条項に同意する必要がある」 (12 ページ)

## Pc-Check が RAID デバイスを識別できない

BIOS で RAID 1 デバイスを作成した場合、そのデバイスは Pc-Check 診断ソフトウェアで RAID デバイスとして識別されません。ただし、Pc-Check では、すべての HDD テストを実行することが可能です。

## キーボードの LED のテスト中に Pc-Check が ハングする

キーボードの LED のテストを行うためのテキストは、診断スクリプトに含まれていません。このテストは手動でのみ実行できます。この問題は現在調査中です。問題が修正されるまではこのテストを決して実行しないでください。

## シリアルポートのテストでエラーが発生する

この問題は現在調査中です。問題が修正されるまではこのテストを決して実行しないでください。

## APM メニューでスタンバイ電源を選択すると 回復できない

この問題は現在調査中です。問題が修正されるまではこのテストを決して実行しないでください。

## USB コントローラのテストを実行した後キーボード 入力できなくなる

この問題は現在調査中です。問題が修正されるまではこのテストを決して実行しないでください。

## 割り込みコントローラのテストの後システムが ハングする

この問題は現在調査中です。問題が修正されるまではこのテストを決して実行しないでください。

## 毎回ライセンス条項に同意する必要がある

この問題は現在調査中です。

---

## Sun Installation Assistant の注意事項

サーバーに OS をインストールするための Sun Installation Assistant (SIA) の使用に関しては、次のような注意事項があります。

- 「SIA を使用して Linux をインストールした後、モニタの解像度をリセットする必要がある」 (13 ページ)
- 「Sun Installation Assistant で RHELv5.1 64 ビット用ネットワークドライバが使用できない」 (13 ページ)

### SIA を使用して Linux をインストールした後、モニタの解像度をリセットする必要がある

SIA を使用して Linux をインストールした場合、ほとんどの場合、OS のインストールが完了した後に実行されるファーストタイムブートの構成中に、モニタの解像度をリセットする必要があります。

モニタの解像度をリセットするには、次の手順に従います。

1. モニタの種類 (メーカーやモデル) を構成します。
2. 正しいモニタ解像度を設定します。

### Sun Installation Assistant で RHELv5.1 64 ビット用ネットワークドライバが使用できない

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) v. 5.1 (64 ビット) のインストールおよび構成後、ネットワークデバイスは予測どおりにマッピングされますが、インターフェイスが機能しません。

この問題は、次の構成が原因で発生します。

- ネットワークケーブルがすべての NIC に接続されていない。  
すべての NIC にネットワークケーブルが接続されていれば、この問題は発生しません。
- ユーザーが、ブート時にすべての NIC をアクティブにするように選択している。  
ネットワークケーブルが接続されている NIC のみをアクティブにするように選択すれば、この問題は発生しません。
- ユーザーが、すべての NIC に静的 IP アドレスを構成している。  
DHCP を選択していれば、この問題は発生しません。
- ユーザーが、すべての NIC に同じネットワークまたはゲートウェイを構成している異なる NIC に異なるネットワークを構成していれば、この問題は発生しません。

## 対処方法

インストールしたシステムのブート後に、次の操作を行います。

1. **root** としてログインします。

2. すべてのインターフェイスに対して **ifdown** コマンドを入力します。

```
ifdown eth0
```

```
ifdown eth1
```

```
ifdown eth2
```

```
ifdown eth3
```

3. ネットワークケーブルが接続されているインターフェイスに対して **ifup** コマンドを入力します。

例:

```
ifup eth0
```

このとき、ネットワークは起動し、作動中であるべきです。

4. リブート中もこの構成を保持するためには、次の手順に従って、ネットワークケーブルが接続されたインターフェイスのみがブート時にアクティブになるようにします。

a. `network-scripts` ディレクトリへ移動します。

```
cd /etc/sysconfig/network-scripts
```

b. 使用していない NIC については、`cfg-eth[1...n]` ファイルを変更し、`ONBOOT=yes` の行を `ONBOOT=no` に変更します。

---

**注** - ネットワークケーブルが接続された NIC で、`ONBOOT=yes` 設定を保持します。

---



---

## Solaris に関する注意事項

この節では、Solaris 10 オペレーティングシステムが動作している Sun Fire X4250 サーバーを対象とする注意事項について説明します。

この節では、次の注意事項について説明します。

- 「Solaris Xserver と NIC のインタフェース」 (15 ページ)
- 「Solaris のインストール後に一部の KVM スイッチが同期しなくなる」 (15 ページ)

## Solaris Xserver と NIC のインタフェース

Solaris Xserver を起動するには、構成したすべてのネットワークインタフェースカード (NIC) をネットワークに接続します。NIC が構成されていない場合、接続する必要はありません。

## Solaris のインストール後に一部の KVM スイッチが同期しなくなる

KVM スイッチを接続したシステムに Solaris 10 6/06 をインストールする際、xserver を起動してオペレーティングシステムにログインするとモニターが同期しなくなることがあります。

考えられる対処方法

1. テキストモードで Solaris をインストールし、次の手順に従います。
2. Tools and Drivers CD から `install.sh` スクリプトを実行します。
3. サーバーをリブートします。  
`install.sh` を実行すると最新の AST2000 VGA ドライバがインストールされるため、問題が解決されず。Solaris で `install.sh` スクリプトを実行するための詳細な手順は、『Sun Fire X4250 サーバーオペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。
4. KVMS over IP を Integrated Lights Out Manager (LOM) の GUI とともに使用します。  
KVMS over IP の詳細は、『Sun Integrated Lights Out Manager 2.0 ユーザーズガイド』を参照してください。
5. GUI モードで Solaris をインストールし、次の手順に従います。
6. フェールセーフブートを実行するか、起動前に Xserver を無効にします。
7. Tools and Drivers CD から `install.sh` スクリプトを実行します。  
Solaris で `install.sh` スクリプトを実行するための詳細な手順は、『Sun Fire X4250 サーバーオペレーティングシステムインストールガイド』を参照してください。

---

## Linux に関する注意事項

次の注意事項は、サポートされている Red Hat または SUSE Linux オペレーティングシステムが動作している Sun Fire X4150 サーバーに適用されます。

- 「Red Hat 5 (64 ビット) が 2 TB の単一ボリューム構成をサポートしない」 (16 ページ)
- 「Red Hat 5 の自動マウントを使用して Tools and Drivers CD を実行できない」 (16 ページ)
- 「キーストロークの自動反復」 (16 ページ)
- 「仮想 USB ドライブを RHEL5 にマウントする方法」 (17 ページ)

### Red Hat 5 (64 ビット) が 2 TB の単一ボリューム構成をサポートしない

ボリュームを別個のパーティションに分割して、それぞれのファイルシステムが 2 TB 未満になるようにする必要があります。

### Red Hat 5 の自動マウントを使用して Tools and Drivers CD を実行できない

ユーザーが Tools and Drivers CD を挿入して自動マウントすると、CD は noexec 属性付きでマウントされるため、install.sh と同様、CD からは何も実行できません。ユーザーは「mount /dev/cdrom /mnt」やそのバリエーションを使用して、手動で CD をマウントする必要があります。

### キーストロークの自動反復

Sun Fire X4250 サーバー上で Linux オペレーティングシステムが動作しているときに文字を入力すると、キーストロークが自動反復します。次の対処方法を使用するか、Red Hat のアップデートされたカーネルをインストールします。次の URL の RHSA-2006:0710-7 を参照してください。

<http://rhn.redhat.com/errata/RHSA-2006-0710.html>

対処方法

1. デスクトップメニューから「Preferences (設定)」→「Keyboard (キーボード)」の順に選択します。
2. 「Keyboard repeats when key is held down (キーを押したら反復入力する)」のチェックを解除します。

# 仮想 USB ドライブを RHEL5 にマウントする方法

1. ファイル `/usr/share/hal/fdi/policy/10osvendor/20-storagemethods-fdii` を編集します。
2. 次のコマンドの前にある文字列「`<match key="volume.fsusage" string="filesystem">`」を探します。

```
<append key="volume.mount.valid_options" type="strlist">codepage=</append>
<append key="volume.mount.valid_options" type="strlist">iocharset=</append>
<append key="volume.mount.valid_options" type="strlist">umask=</append>
<append key="volume.mount.valid_options" type="strlist">uid=
</append>
</match>
</match>
```

3. 手順 2 で示したコマンドの下に次の行を入力します。

```
<!-- Added for the issue that virtual ISO image can't be
shown -->
<!-- as an icon when this virtual device is inserted to RHEL5
system -->

<match key="@block.storage_device:storage.vendor" string=
"Virtual">
<match key="@block.storage_device:storage.model" string=
"DVD/CD-ROM">
<match key="info.category" string="volume">
<match key="block.is_volume" bool="true">
<match key="volume.fsusage" string="">
<merge key="volume.fsusage" type="string">filesystem</merge>
<merge key="volume.fstype" type="string">iso9660</merge>
</match>
</match>
</match>
</match>
</match>
```

4. システムをリブートします。

---

## Windows 2003 Server の注意事項

次の注意事項は、サポートされる Windows 2003 Server オペレーティングシステムが動作している Sun Fire X4250 サーバーに対して適用されます。

- 「出荷時にインストールされている Windows Server 2003 R2 オペレーティングシステムの初期セットアップ」(18 ページ)
- 「Windows Server 2003 オペレーティングシステムのリカバリ」(18 ページ)
- 「Intel PROSET Teaming Utility のインストール方法を示すドキュメントの訂正」(19 ページ)
- 「SAS バックプレーンエキスパンダが LSI ドライバを要求する」(19 ページ)

## 出荷時にインストールされている Windows Server 2003 R2 オペレーティングシステムの初期セットアップ

出荷時に Windows Server 2003 R2 オペレーティングシステムがインストールされているサーバーには、『Getting Started Guide (ご使用の手引き)』が入っています。このガイドをお読みになってから、Windows Server 2003 R2 オペレーティングシステムの初期セットアップを実行してください。初期セットアップの手順については、『Sun x64 Servers Windows 2003 R2 Preinstall Release Notes (Sun x64 Servers Windows 2003 R2 プリインストールに関するリリースノート)』を参照してください。

## Windows Server 2003 オペレーティングシステムのリカバリ

出荷時にインストールされているデフォルトの Windows オペレーティングシステムを復旧する必要がある場合は、オプションのリカバリメディアキットやオンラインで入手可能な『Sun x64 Servers Windows Server 2003 R2 Recovery Installation Guide (Sun x64 Servers Windows Server 2003 R2 リカバリインストールガイド)』の指示に従ってください。リカバリメディアキットをお持ちでない場合は、サポート担当者にお問い合わせください。

# Intel PROSET Teaming Utility のインストール方法を示すドキュメントの訂正

『Sun Fire X4250 サーバーオペレーティングシステムインストールガイド』には、Windows 2003 Server に NIC Teaming ドライバをインストールする方法が述べられていますが、この説明は正しくありません。正しく NIC Teaming ソフトウェアをインストールするには、次の手順に従います。

1. **Tools and Drivers CD** バージョン 1.1 から、任意の方法で **Ethernet** ドライバをインストールします。
  - 自動実行 — Tools and Drivers CD を挿入し、「Autorun (自動実行)」メニューから「Install/Update drivers and optional packages (ドライバとオプションパッケージをインストール/更新する)」を選択します。
  - 手動 — Ethernet のプロパティを開き、デバイスマネージャを使用して手動でドライバを更新します。
2. **Ethernet** カードがインストールされ、IP アドレスが割り当てられたら、**Proset** インストーラを実行します。

このインストーラは、Tools and Drivers CD (バージョン 1.1 以降) の次の場所にあります。

```
drivers\windows\IntelNic\2003\PROSET\2003_xx
```

xx が 32 または 64 ビットの場合は、PROSETDX.msi インストーラを使用します。
3. 画面の指示に従って操作し、表示されるオプションのリストから「Advanced Network Features (詳細なネットワーク機能)」を選択します。
4. **PROSET Teaming** オプションを使用するには、デバイスマネージャで「**Ethernet** カード」を選択し、「プロパティ」を選択します。
5. 「Teaming」および「VLAN」という新しいタブがインストールされます。

## SAS バックプレーンエキスパンダが LSI ドライバを要求する

お使いの Windows サーバーに SAS バックプレーンエキスパンダがインストールされている場合は、LSI ドライバをインストールする必要があります。次のいずれかの方法で、LSI ドライバをインストールします。

- **Tools and Drivers CD** を使用して、LSI ドライバの自動インストールを実行します。
- 次の方法で、**Tools and Driver CD** を使用して手動で LSI ドライバをインストールします。

- a. システムの DVD ドライブに Tools and Drivers CD を挿入します。
- b. 「スタート」->「コントロールパネル」->「システム」->「ハードウェア」->「デバイスマネージャ」を順にクリックします。
- c. 一覧の中から、他のデバイスの下に LSI SAS エクスパンダを探します。
- d. LSI SAS エクスパンダを右クリックして、ドライバの更新を選択します。
- e. 「一覧または特定の場所からインストールする」を選択します。
- f. Tools and Drivers CD で、次の場所を参照します。  
drivers\windows\RAID\LSI\2003\_xx  
xx は 32 ビットまたは 64 ビットです。

---

## LSI 3081E ホストバスアダプタに関する 注意事項

次の注意事項は、LSI 3081E HBA が搭載されている Sun Fire X4250 サーバーに適用されます。

- 「ミラー構成へのアップグレードに HDD 容量が必要」(20 ページ)
- 「データのマージをサポートする唯一のアップグレードパス」(21 ページ)
- 「RAID 構成を同期モードにするとサーバーがハングすることがある」(21 ページ)

### ミラー構成へのアップグレードに HDD 容量が 必要

ミラー構成にアップグレードする場合は、ハードディスクの終わりにパーティション分けされていない 100M バイト の空き容量が必要です。

## データのマージをサポートする唯一のアップグレードパス

データのマージをサポートする唯一のアップグレードパスは、シングルディスクからミラー構成へのアップグレードのみです。これはカードの制限です。シングルディスクから IMe (統合ミラー拡張) または IMS (統合ミラーストレイプ) にアップグレードする場合は、オペレーティングシステムとそのデータが失われ、再インストールかシステムの回復が必要になります。

## RAID 構成を同期モードにするとサーバーがハングすることがある

ディスクの RAID 設定を同期モードにすると、リブートしたときにサーバーがハングすることがあります。このハングによって、ディスクの RAID 構成が失われます。同期処理中にリブートしないでください。この問題は現在調査中です。

---

## StorageTek SAS コントローラに関する注意事項

次の注意事項は、Sun StorageTek SAS コントローラが搭載されている Sun Fire X4250 サーバーに適用されます。

- 「OS でアクセスする前に StorageTek BIOS セットアップユーティリティーを使用してドライブを初期化してアレイを作成する」 (21 ページ)
- 「Red Hat Linux 5 に StorageTek 管理ソフトウェアをインストールする前に RPM をインストールする」 (22 ページ)

## OS でアクセスする前に StorageTek BIOS セットアップユーティリティーを使用してドライブを初期化してアレイを作成する

StorageTek SAS コントローラに接続されたディスクをオペレーティングシステムで使用するには、まず StorageTek BIOS セットアップユーティリティーを使用してドライブを初期化し、アレイを作成します。StorageTek BIOS セットアップユーティリティーにアクセスするには、サーバーの POST 中に Ctrl-A キーを押します。

## Red Hat Linux 5 に StorageTek 管理ソフトウェアをインストールする前に RPM をインストールする

Red Hat Linux 5 に StorageTek 管理ソフトウェアをインストールするには、まず rpm をインストールする必要があります。これは、Red Hat Linux 5 で Java がサポートされていないためです。お使いのオペレーティングシステムに対応する rpm を使用してください。

- 32 ビット OS の場合: `xorg-x11-deprecated-libs-6.8.1-23.i386.rpm`
- 64 ビット OS の場合: `xorg-x11-deprecated-libs-6.8.1-23.EL.x86_64.rpm`

これらは、Tools and Drivers CD の `\drivers\linux\RAID\StorageTEK\MGMT\バージョンフォルダ` に収録されています。適切な rpm ファイルを Red Hat 5 システムにコピーして、`rpm -install` コマンドを実行します。

---

## Sun 10G ネットワークアダプタの注意事項

次の注意事項は、Sun 10G ネットワークアダプタが搭載されている Sun Fire X4250 サーバーに適用されます。

- 「PCI-Express スロットがすべて使用されていると、PCI オプション ROM をコピーするための十分な容量がない」(22 ページ)
- 「Sun 10G ネットワークアダプタで、ファームウェアのバージョン 3.12 への更新が必要になる」(23 ページ)

### PCI-Express スロットがすべて使用されていると、PCI オプション ROM をコピーするための十分な容量がない

PCI-Express スロットがすべて使用されている場合は、インストールできるオプション ROM カードのサイズが制限されます。サーバーでオプション ROM の容量が足りなくなった場合は、次のようなメッセージが表示されます。

Not enough space to copy PCI Option ROM (PCI オプション ROM をコピーするのに十分な容量がありません)



## 対処方法

このメッセージが表示されたら、次の手順に従ってオプション ROM の一部を無効にします。

1. F2 キーを押して BIOS セットアップユーティリティを開きます。
2. 「Advanced (詳細設定)」 → 「PCI Configuration (PCI 構成)」の順に選択します。
3. PCI オプション ROM を選択して無効にします。

## Sun 10G ネットワークアダプタで、ファームウェアのバージョン 3.12 への更新が必要になる

Sun Fire X4250 が正しく動作するために、Sun 10G ネットワークアダプタで、ファームウェアのバージョン 3.12 への更新が必要となる場合があります。このファームウェアの更新へのリンクは次のとおりです。

<http://www.sun.com:80/download/products.xml?id=45a593ce>

---

## ドキュメントの注意事項

Sun Fire X4250 サーバーのドキュメントに関して、次のような注意事項があります。

- 「設置マニュアル内の、プリインストールされている Solaris のシリアルコンソール ttya/ttyb のデフォルトの記述が誤っている」(24 ページ)
- 「プリインストールされている Windows Server 2003 が製品リリース段階で使用不可である」(24 ページ)

## 設置マニュアル内の、プリインストールされている Solaris のシリアルコンソール ttya/ttyb のデフォルトの記述が誤っている

『Sun Fire X4250 サーバー設置マニュアル』(820-5742-10 (v2)) では、プリインストールされている Solaris をセットアップするためのデフォルトのシリアル管理ポートは ttyb (COM 2) であると記載されています。

このシリアル管理ポートは、現在は ttya (COM 1) になっています。

## プリインストールされている Windows Server 2003 が製品リリース段階で使用不可である

『Sun Fire X4250 サーバー設置マニュアル』(820-5742-10 (v2)) の第 5 章では、Sun Fire X4250 サーバーのプリインストール オプションとして Windows Server 2003 が使用可能であると述べられています。

このオプションは、サーバーの初期リリースでは使用不可です。ただし、今後使用可能になる予定です。